

## 編集後記

この第 24 号もこれまでと同様に名古屋大学附属図書館のレポジトリに登録されるとともに、技術教育学研究室（横山研究室）の HP に掲載される。研究室の HP には、室報全体を PDF 化したものを掲載している。HP のアドレスは以下の通りである。

[http://gijyutukyouikugaku.blogspot.com/p/blog-page\\_58.html](http://gijyutukyouikugaku.blogspot.com/p/blog-page_58.html)

本号は、今年度の 3 冊目の研究室報告である。

最初の論文はスウェーデンのルンド大学の Fay Nilsson 氏による **technical secondary school** に関する論文で、地域の経済的な必要から制度化された **technical secondary school** が果たした役割について、入学生がどこから来たのか、卒業後、その地域の産業に職を得たのかどうかを実証的に検討したものである。この学校が果たした役割は、時期とともに変化していた。1960 年代には **fachskolan** として再編成されることになっていくが、技手を養成していた時期、技能者を養成していた時期、このことは地域によって異なっていた面もあり、さらなる研究が求められているテーマである。

三宅・横山論文は、現代日本の製造業の現場での変化を、とりわけ中小企業の事例を取り上げたものである。製造現場では、デジタル技術の導入が急速に進んでいる。大企業では大量生産のために自動化されやすく、中小企業では、高度な技術・技能をもつ多品種少量生産の事業所がある一方で、単純な製品を生産する事業所まで多様な事業所が存在する。そのような中で後継者がいない町工場が次第に閉鎖されている。ある中小企業の工場では、人手不足や技能伝承の解決策の一つとして、デジタル技術を導入した。しかし、高度な NC 工作機械を導入しても、不具合がでるとどうしてよいかわからず、高度な機械もブラックボックスになった。その企業は、NC 工作機械などのデジタル技術の導入には、基礎的な技能を持った技能者の育成が求められることに気づき、社内の研修施設を設立した。そこでは、基礎的な技能が体系的に指導されている。また、外国からの技能実習生への技能の指導については、曖昧な言葉では通じないので、可能な限り数字や絵で指導するようになっていった。以前は「指導者の背中を見て覚えろ」「後ろ姿を見て学べ」「技能は盗め」などという技能の指導方法であったが、それを言葉や数字や絵に「見える化」するように変化していった。この施設は、次第に他社の社員に対しても基礎的な技能を教えるようになる。この企業は航空機部品など高度な精密部品を製作する企業であり、独自の高度な技術・技能をもっており、その分野は狭く、ニッチ分野を対象としている。それゆえに自社の製品だけでは完結せず、他社の製品をもって組み立てることによって市場がさらに広がる。高度な技術・技能を他の中小企業ももたなければ、自社の発展も成り立たないという事情がこの動きの背景にある。これは、技術や技能を通じて、他社と協同し共存するニッチ企業のあり方を追求しているといえよう。この企業の社長はこのような施設をさらに全国的に展開し、他の中小企業と協同して発展させていく取り組みを始めている。「日本のものづくりは、世界に類を見ない優れた現場力を誇っている。それは職人の存在なくしてあり得ない」「そのためにもこれからの若い人にもものづくりの楽しさを味わってほしい」という願いから、閉鎖された町工場を実習施設として活用し、児童養護施設の子どもや若者にもものづくりの楽しさを味わってもらい、その中からものづくりに関心がある人を技能者に育て、社会に送り出すことを構想している。このような事実は、日本における技術教育の新しい動きとして注目しておきたい。

(横山悦生)